

# 2025年日本臨床スポーツ医学会（JSCSM） —米国スポーツ医学会（AMSSM） トラベリングフェロー報告記

面谷 透\*

## ●はじめに

このたび、日本臨床スポーツ医学会および同国際委員会のご支援のもと、2025年米国スポーツ医学会 American Medical Society for Sports Medicine (AMSSM) 年次総会に、トラベリングフェローとして参加させていただく貴重な機会をいただきました。AMSSMは、米国を代表するスポーツ医学の学術団体であり、毎年開催される本総会には世界中から臨床・研究の第一線で活躍する医療者が集い、最新の知見や臨床経験を共有する場です。

本報告では、主要講演、プレカンファレンスセミナー、ならびに現地での施設見学・診療見学、そして交流の様子についてご紹介いたします。このような貴重な国際交流の機会を得られたのは、日本臨床スポーツ医学会の国際的な連携推進への長年のご尽力、ならびに現地で温かく迎え入れてくださったAMSSMの皆さまのご厚意のおかげです。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

## ●AMSSM2025 の概要とテーマ

2025年4月22日から27日にかけて、アメリカ・ミズーリ州のカンザスシティ・コンベンションセンターにて、第34回 AMSSM 年次総会が開催されました（図1）。本年のテーマは“Elevate the Field : Inspiring Innovation in Sports Medicine”であり、スポーツ医学領域における革新的な

取り組みや研究の進歩を強調する内容でした。会期中は、臨床現場の質の向上から技術革新に至るまで、多岐にわたる最先端の話題が議論され、世界各国から集まった参加者が知見を共有しました。メインホールは約2000人収容の巨大な空間で、盛況具合がうかがえました（図2）。

## ●主要講演（基調講演・招待講演）

本総会では、スポーツ医学の発展に関する主要講演（Keynote/特別講演）が複数開催され、大きな注目を集めました。特に印象に残ったものを共有させていただきます。

### プレジデンシャル・キーノート（Presidential Keynote）

東京2020オリンピックおよびパリ2024オリンピック女子体操競技金メダリストであるスニ・リー氏（Sunisa “Suni” Lee）が招かれ、特別基調講演を行いました。世界的アスリートの視点から、自身の競技人生や怪我の経験、メンタルヘルスの重要性、次世代へのメッセージなどが語られ、参加者にとって非常にインスピレーショナルな内容となりました。リー氏は若い世代の象徴的存在でもあり、その言葉はスポーツ医学に携わる医療者にとって、新たな発想と情熱を呼び起こすものとなりました。

### Hough 記念講演（Hough Memorial Lecture）

スポーツ医学の国際的専門家であるポール・ダイクストラ医師（Paul Dijkstra, MBChB, DPhil）が「スポーツ医学におけるAI（人工知能）の活用」をテーマに講演しました。ダイクストラ医師はスポーツ医学分野での豊富な経験と研究実績を持

\* 東京先進整形外科

Corresponding author: 面谷 透 (t0ru0m0dani@gmail.com)



図1 会場のカンザスシティ・コンベンションセンター

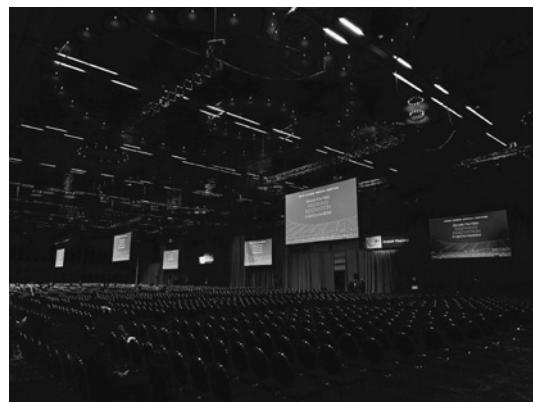


図2 約2000人収容のメインホール

ち、本講演ではAI技術がアスリートのヘルスケアや競技パフォーマンスの向上にどのように貢献し得るかについて最新の知見を紹介しました。具体的には、傷害予測やリスク評価への機械学習の応用、リハビリテーションにおけるデータ駆動型アプローチ、そしてビッグデータ解析による競技力向上の可能性などが議論されました。AIの活用は今後のスポーツ医学の革新的テーマであり、参加者から多くの質問が寄せられました。

#### Anderson 記念講演 (Anderson Memorial Lecture)

南アフリカ出身の理学療法士・研究者であるノンハンラ・ムクンブジ博士 (Nonhlanhla "Noe" Mkumbuzi, PT, PhD) による講演で、「資源の限られた環境におけるスポーツ医学のグローバルイノベーション」がテーマでした。ムクンブジ博士はアフリカを中心とした低リソース環境下でのスポーツ医療の現状と革新的取り組みについて紹介し、限られた設備や資源の中でも創意工夫によってスポーツ障害予防・治療の質を高めている事例を共有しました。例えば、地域コミュニティでの基礎的なメディカルチェック体制の構築や、低コストで実施できるリハビリ技法の開発など、その内容は参加者にグローバルヘルスの視点を提供するものでした。講演後のQ&Aでは、異なる医療環境間の知識共有や協力体制について活発な議論が行われました。

#### AAPM & R 招聘講演 (Exchange Lecture)

米国リハビリテーション医学会(AAPM&R)との交流講演として、シンディ・リン医師 (Cindy Lin, MD) が「ウェアラブル技術の臨床応用」に関する講演を担当しました。リン医師はウェアラブル

ルデバイスから得られる生体データを実際の臨床診療や競技者指導にどう役立てるかについて、具体例を交えながら実践的視点で解説しました。参加者からはデータの信頼性やプライバシー確保、医療現場への統合方法について質問が上がり、技術と臨床の橋渡しに関する有益な討議が行われました。

以上のような主要講演は、学会テーマである「イノベーションを鼓舞する」という趣旨にふさわしく、トップアスリートの経験談から最先端技術・グローバルヘルスまで幅広い内容が網羅されました。

#### ●プレカンファレンスセミナーとハンズオンワークショップ

本大会の開幕前日・初日には、専門領域ごとのプレカンファレンスセミナーやハンズオンワークショップが開催され、実践的スキルや最新知識を習得できる場が提供されました。

##### 運動器領域の超音波ハンズオン

「下肢スポーツ超音波の基礎」や「上級スポーツ超音波コース」などのコースが開催されました。最新の携帯型エコーの活用法、関節内注射のエコーガイド手技、超音波下での病変評価手順などが少人数制で実践的に指導され、参加者は講師陣の指導の下で技術を磨きました。これらコースは毎回人気なようで、事前登録で満席となるセッションもありました。

##### キャリア開発セッション

今回新設された取り組みとして、若手～中堅医師向けのキャリア開発プレカンファレンスも企画されました。「Leading from the Middle : Early to

「Mid-Career Leadership Skills」と題したセッションでは、医療組織内で中堅層がリーダーシップを発揮するためのスキル、教育・研究と臨床の両立方法、メンターシップの活用などが議論されました。特にWomen in Leadership (W.i.L.L.) の主催による女性医療者のリーダー育成プログラムも組み込まれ、ダイバーシティ推進の観点からも有意義な内容でした。

### 体外衝撃波治療（ESWT）セミナー

筆者自身も登壇者として参加した、ESWTに関するプレカンファレンスセミナーが開催されました。様々な疾患領域におけるESWTの基礎と臨床応用が講義形式で解説されました。さらに同日夕方には初心者向けおよび中上級者向けのハンズオンセッションも並行して実施され、機器を用いた実技指導が行われました。これらハンズオンは満席となる盛況ぶりで、ESWTへの関心の高さがうかがえました。

筆者は「ESWT in Pediatric/Adolescent Athletes（小児・思春期アスリートへのESWT応用）」に関する講演を担当し、成長期特有の傷害（例：オスグッド・シュラッター病や踵骨骨端症、坐骨骨端症など）に対するESWTの有効性と安全性について報告しました。近年、思春期アスリートに対するESWTの有用性を示す初めてのケースシリーズが報告されるなど、この分野は新たなエビデンスが蓄積されつつあります。講演では、衝撃波治療が投薬や手術に代わる選択肢として成長軟骨への悪影響なく疼痛緩和や機能改善をもたらし得ること、加えて、適用にあたっての留意点（照射エネルギー設定や頻度）について討議しました。参加者からは「若年層にも安全に使えるのか」「適応は？」といった質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。小児～若年アスリートへのESWT応用は今後の研究と臨床展開が期待される領域であり、本セミナーを通じてその可能性と課題が共有されました。

### ●施設見学：University of Missouri-Kansas City

今回の渡航中には、Dr. Gibsonのご案内のものと、University of Missouri-Kansas City (UMKC) の学生アスリート用トレーニング施設を見学する機会を得ました（図3）。UMKCはNCAAディビジョンIに所属する大学であり、キャンパス内には競



図3 University of Missouri-Kansas City のバスケットコート

技スポーツに関わる学生を対象とした、包括的かつ高度な支援体制が整備されていました。

施設内には、最新のフィットネス機器を備えたトレーニングジム、運動解析機器、理学療法ルーム、氷水プールや温水リカバリータブなどの物理療法設備が完備されておりました。また、アスレティックトレーナー、理学療法士、栄養士、メンタルヘルスの専門家などが常勤しており、選手一人ひとりに対して身体的・精神的・学業的にバランスの取れた支援を提供している様子がうかがえました。

### ●診療見学：Kansas City Orthopedic Alliance

Kansas City Orthopedic Alliance (KCOA)にて、リハビリテーション医のDr. Michael Khadaviの診療を見学する貴重な機会をいただきました。KCOAはカンザスシティ地域で複数のクリニックを開設しており、外来、画像診断、手術、リハビリテーション、そして再生医療までを包括的に提供する地域屈指の医療機関です。

Dr. Khadaviの診療では、超音波ガイド下でのPRP（多血小板血漿）注射およびBMAC（骨髓由来濃縮物）が日常的に行われており、その手技の正確さと安全性には目を見張るものがありました。BMACは腸骨から採取した骨髓液を遠心分離により濃縮された生成物であり、関節内や腱付着部、そして骨内などの患部に注入されます。超音波によってリアルタイムに患部を可視化しながら、正確な位置への投与を実現している点が特徴的でした。

特筆すべきは骨内病変へのPRPやBMACの



図4 Dr. Khadavi・Dr. Gibson・Dr. Alex, そしてそのご家族達と

投与です。筆者も取り組んでいる治療方法ですが、よりチャレンジングにトライしエビデンスを蓄積しているのを目の当たりにし、大いに刺激を受けました。このような治療は、日本においても注目が高まりつつありますが、米国でもまさに最前線のトピックであり、Dr. Khadaviの診療はその最前線を走っていました。

### ●交流の記録：Dr. Khadavi 宅での夕食会

Dr. Khadaviのご厚意により、ご自宅での夕食会にご招待いただきました。奥様とお子様方にも温かく迎えていただき、現地の医師・家族と直接触れ合うことができたことは、学術的な交流を超えた、非常に心に残る経験となりました（図4）。

食卓では、医療システムの違い、スポーツドクターとしてのキャリア、再生医療の将来性などについて率直な意見交換が行われました。また、医

師としての使命感や倫理観、ご家族を含めたライフスタイルなど、診療所では知ることのできないDr. Khadaviをはじめとした先生方の人間的な魅力に触れることができ、大いに刺激を受けました。

こうした家庭的な交流は、国境や文化を超えて人と人とのつながることの大切さを改めて実感させてくれました。このご縁を大切にし、今後の国際的な学術・臨床交流に活かしていきたいと強く思っております。

### ●おわりに

今回のAMSSM2025 トラベリングフェローとしての参加を通じて、スポーツ医学が世界的にどのように進化し、多様な価値観と実践が融合しながら発展しているのかを、肌で感じることができました。また、学会発表のみならず、現地施設での見学や診療同行、さらには医師とご家族との交流を通じて、単なる技術や知識の交換にとどまらない、「人と人とのつながり」こそが国際医学交流の本質であることを深く実感いたしました。

このような貴重な機会を与えてくださった日本臨床スポーツ医学会および同国際委員会の皆さま、特に本トラベリングフェローご担当の塚原由佳先生、神谷阿久里先生に、改めて心より感謝申し上げます。また、フェローとして快く迎え入れ、学術的にも人間的にも豊かな経験を提供してくださったAMSSMの関係者の皆さまに深甚なる謝意を表します。今後は、この経験を日本国内での臨床・教育・研究に還元し、スポーツ医学のさらなる発展に微力ながら貢献してまいりたいと存じます。